北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

2002年度岩見沢分校卒業論文等概要

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9345

2002年度　岩見沢校学士論文等概要

〈学校教員養成課程〉

教育発達臨床系

学校教育　本年度提出論文数は以下の13本である。

「女子学生の服装変遷」「日本の戦後から1980年代までの家庭教育の変遷と今後の展望」「学校教育における性教育の試み－『総合学習』だからこそできること－」「食生活研究」「『生きる力』の一考察」「小学校英語教育－その可能性を求めて－」「国際協力論－エクアドルにおける教育協力－」「いじめの解決に迫る－教師と学校は何をするべきなのか－」「学校統廃合について考える」「少年犯罪」「保育に関する一考察－共育社会の構築と保育の在り方について」「学習塾と学校の関係－学習塾隆盛時代の日本の教育について考える－」「障害のある児童が生活する通常学級における学級づくり－ある小学校の実践から－」。

心理学　本年度は、以下11篇の論文が提出された。「青年の積極的精神的健康・不適応症状と夫婦関係・親子関係の関連」「キーワードに注目した要約方法」「完全主義の下位特性とストレスコーピングの関連性」「集団の凝集性とメリットが社会的手抜きに及ぼす影響について」「個人特性と箱庭表現の関連性についての一考察」「自己概念の変化に関する研究」「大学生の所属意識と生きがい感・時間的指志向性の関係について」「自尊感情タイプからみる相手への好意の感情の差異」「パラノイド認知とその形成因の検討」「物語構造を活用した短作文評価」「川柳療法」。いずれも実践的な研究である。

総合教育　総合教育第１研究室では「牧口常三郎の教育実践論」、「セレスタン・フレネの教育論の研究－授業論を中心に－」、「札幌市立東白石小学校における『さけ学習』実践の展開と分析－1970年代後半から現在までの教育課程構築原理の質的差異に注目して－」の３本が、第２研究室では「子どものためのスポーツ少年団のあり方の一考察」、「学校図書館専任職員の必要性」、「総合的な学習の時間における課題設定はどうあるべきか－岩見沢市内小学校の実践をもとに－」、「身体に気付き、身体によって他者と関わるために何をすべきか－メープル小学校での実践を分析して－」の４本の計７本が提出された。

社会・言語教育系

国語　古典文学２、近代文学４、国語学３、国語科教育１の計10篇が提出された。そのうち①『竹取物語』論－その虚構性を考察する、②福永武彦『死の島』論、③「星新一の文体について－計量国語学的立場からの考察－、④安部公房三部作論、⑤横光利一「機械」論の５編が優れている。その中でも最初の２篇は特に優れ、①は竹取物語の虚構性の意義を多様な視点から考察している。②は小説『死の島』を心理学・哲学・文学理論などを基底にすえながら解読を試みる。

他の論文にも問題意識はうかがえるが、論の構成、先行論文の検証や分析などに深まりが不足している。論の質的向上を考えると、はやめの取り組みが求められる。

書写教育　本年度は以下の３篇が提出された。「顔真卿の書とその影響」「褚遂良の書芸術と時代」「金文の書体の変遷について、時代背景をふまえた一考察」。いずれも、それぞれの卒業制作等の書活動に深く関わりのあるものを題材としている。その書体験を内容に取り入れようとする意欲が感じられた。

外国語　今年度は11名の学生が論文を提出した。内訳は文学関係が５本、内容的に文化に近いもの３本、教育関係が３本だった。卒業論文のタイトルは以下のとおりである。Aoki, s. "Comparison of Blacks in *Uncle Tom's Cabin and Uncle Tom's Children,*" Ito, J, "A Study of Relation between Wolves and People," Ito,Y. "The Effect of Proficiency and Task Type on The Second Language Self-repair behavior," Egusa,C. "The Effects of Fluency, Accuracy, Complexity on Second Language Speech Production," Sasaki, Y. "A Study of *Crucible,*" Sato,Y. "The Roles of The Garden in Burnett's *The Secret Garden,*" Suzuki, K. "A Study of Nonsense in Mother Goose," Takayanagi, M. "The Image of Women and Homes in Alcott's *Little Women, Behind a Mask,* and A *Long Fatal Love Chase,*" Matsumoto, W. "A Study of *M.Butterfly,*" Yamaguchi, S. "A Study of Irish Fairies in Yeats'Fairy Tales," Yamashita, J. "L1 Use as Reading Strategies by EFL Leaners:The Effects of Types of L2 Texts and of L2 Reading Proficiency of EFL Learners"

歴史　本年度は日本史分野４編・外国史分野４編の計８編の学士論文が提出された。日本史では史料読解を基礎とした考察を試みる姿勢が、外国史では豊富な文献博捜のなかで思考をめぐらせていこうとする方向性が、それぞれ見られる結果となっている。総じてオーソドックスな歴史学の分析・立論の手法を踏まえた堅実な結論を導き出そうとしており、好感が持てるものであった。堅実な行論の難しさを経験したことが、今後いろいろな局面で応用されることを希うものである。各人の提出論題は、以下のとおり。

〈日本史分野〉

安藤達磨「鎌倉前期における足利氏当主の政治的地位－義兼・義氏を中心として－」

檜森洋輔「長州藩幕末諸隊から見た身分上昇の過程－身分上昇を渇望する百姓層の動向－」

藤岡真弓「平安期における後宮社会の変容－内侍を中心に－」

藤本悦子「徳川将軍継嗣問題－八代吉宗を中心にした考察－」

〈外国史分野〉

石川貴那「ローマにおける女権の拡張－ローマ法にみる女性像とその現実－」

石山雅人「イギリス史の分岐点としてのエリザベス１世の治世」

龍本英紀「草原の国家－遊牧民国家の発展から遊牧民国家の本質を考察する－」

横手利枝「リチャード２世と農民一揆－1381年イングランドにおける農民一揆の歴史的意義－」

法律学　今年度の法学研究室では、３名の４年生がそれぞれの卒業論文を完成させた。「移動困難者のバリアフリーに関する一考察～日本の法制度の問題点」は、いわゆるハートビル法および交通バリアフリー法について調査し、海外の法制度との比較を試みつつ、よりよい法制度のあり方への提言を行った論文である。「犯罪少年と少年事件被害者の権利の共存に関する一考察～修復的司法を手がかりに～」は、刑事事件

被害者の権利について、少年法改正に絡めたアプローチで結果的になかなか面白いものとなった。「介護保険と家族福祉についての一考察」は、社会学上の“家族福祉”という概念を持ちこみ、介護保険制度を通じて家族福祉が実現するかどうかを論じた論文で、力作である。

社　会　学　本年は3編が提出された。論文「『世間』に見る日本」は、「世間」と個人という日本文化論的テーマを先行研究と対話的に関わりつつ論じたもので、メディアによる「新しい世間」の成立の吟味などに興味深いものがあるが、分析がやや主観的に流れる傾向がある。「フリーター問題」に関する論文は、その増加の社会的および意識的要因についての考察に深度があり、また日本型雇用とイギリスの若年就労・失業政策との対比の中に今後の展望を見るという発見を示しているが、参照資料に無批判的に寄りかかった部分も少なからず見られる。論文「ＯＤＡと開発教育」は、諸資料に丹念にあたって丁寧にまとめられた労作であるが、既に膨大な先行研究蓄積されている分野でもあるせいか、考察がいささか平板に流れているきらいがある。日本における開発教育の問題性と課題性の核心部分について、いま少しの鋭い分析が期待された。

哲学・倫理学　本年の卒業生は4人だった。かねてから卒論は、学生の関心を第一にということで指導してきた。今年は、神話関係一編、仏教関係二編、時間論一編であった。神話を扱った論文は、主として『古事記』『日本書記』をテーマとし、仏教関係は法然と蓮如の思想・歴史を追究したものであった。時間論はアリストテレス以降、ベルクソン、マクタガートに至るまでの時間の哲学的捉え方を扱ったものである。

例年のごとく準備時間が不足し、十分構想通りにいかなかった反省はは残るが、できるだけ背伸びをしないで身の丈にあった論文を、との趣旨は活かされているように思われる。そして、それぞれ個性的な内容であって、今後の人生にとってひとつの指針となりうるのではないかと期待できる。

社会科教育　本年度の提出論文は4件である。「岩見沢市における“道”の変遷と人々の関わり」は、北海道の“道”の変遷を俯瞰した上で、駅と市街地を核として成立した岩見沢を道路網の変遷の枠組みから歴史地理学的に明らかにしたもので、作成した地図は地域学習に活用できる労作である。「流域住民との関わりから見る新川の変遷」は、旧琴似町地区を中心に新川の役割を追究したもので、川を素材とする地域学習の教材化の可能性を示した。「北海道栗山町の“まちづくり”ー小さなまちの大きな挑戦ー」は、サッカーW杯のキャンプ誘致が象徴するまちづくり運動の内実を、地域通貨や市街地近代化事業と関わらせて追究したものである。「栄養学者佐伯矩の研究」は、大正3年、世界に先駆けて栄養研究所をつくり、日本の栄養学を創始した佐伯矩の生涯と業績をたどることにより、現代の食の在り方を考察したものである。

自然・生活教育系

数　　学　数学科教育専攻では以下の四グループに分かれて、それぞれの課題について演習形式で学んだ。

代数ゼミ：コンピュータを使った初等整数論に関するテキストを三名の学生で輪講した。

幾何ゼミ：
解析ゼミ：パソコンを使って初等統計学におけるデータ処理の実習をした。

物理学　本年度の学士論文は二篇である。「電池の教材化と授業展開に関する研究」（藤森健太）は、教育実習で担当した授業において、生徒が最も興味を示したと思われる単元内容を卒業研究のテーマとしたものである。電解溶液として、コーラなど生徒の日常と関係の深いものを選択し、その起電力の大きさを電子オルゴールの音によって判定させるなど、研究内容は創造的な授業展開に結びついたものである。「環境教育に関する学校教育実践の研究－総合的学習との関わりについて－」（牧野直樹）は、今日の環境問題を分析し、学校教育における環境の学習の重要性をあげ、その実践方法について研究を行ったものである。環境教育は、単なる知識の獲得ではなく、子どもたちの環境保全に向けた行動が伴わなければならないことを指摘し、幾つかの教科にわたった総合的学習の授業指導案を作成している。

化学　以下の５件の卒業研究が報告された。
学部卒業
小林　幸司：伝導度測定法に関する考察
田中　邦直：無機化合物の昇温実験
銅堂麻衣子：圧力センサーを用いた反応速度実験の簡便化
村井　康俊：自動滴定装置を用いる実習実験
山田裕次郎：シリカゲルを用いるコロイドの化学教材

生物学　（植物分野）緑藻類２種の生活環にかかわる課題を絞り込んで検討した。梅原康孝「カワシオグサの遊走子形成および無菌培養について」は、放出された遊走子から藻体を無菌培養に導こうとしたもの、また、成澤　淳「岩見沢近郊産パンドリナの有性生殖」は、有性生殖過程の詳細と、生殖的隔離の有無を明らかにしようとしたもの。いずれも有益な結果は出ているが、完全なものになるまではいま一歩。
（動物分野）「キイロショウジョウバエfru遺伝子の解析及び性行動関連遺伝子の調査」（前山潤）では、脳における遺伝子の発現に雌雄差があることをみいだし、その雌雄差と交尾行動の関係を調査した。「キイロショウジョウバエ雄特異筋（MOL）を司る神経部位の解析」（高橋ひとみ）では、雄特異筋の形成を司る神経細胞の同定を試みた。同定には至らなかったが、今後解析の手がかりを得ることができた。

地学　2002年度の卒業論文は、北部北海道幌延町南部地域の新第三系及び第四系の層序学的研究である。本研究の主要課題は、①新第三系（増幌層・稚内層・声問層・勇知層）の微化石による年代決定、②鮮新統勇知層の地質年代と堆積環境、③調査地域周辺における勇知層と更別層の層序関係の広域的対比である。
①については、珪藻化石の分析により、声問層の地質年代をほぼ確定することができた。②に関しては、有効な化石試料は得られなかったが、勇知層の岩相変化の特徴が明らかになった。また、③については、凝灰岩鍵層に基づいて一昨年度及び昨年度の卒論との詳細な対比を行い、これらの地層が同時異相の可能性を指摘した。
以上、化石の産出に乏しいため室内データーにやや不足の感があるが、野外調査は綿密であり、幌延町周辺地域における新第三系の層序対比に重要な知見を追加した。

理科教育　本年度の卒業論文は「新第三紀鮮新世～第四紀更新世の石狩低地帯の古環境とその教材化」の１件であった。本研究により、馬追層堆積時（１～100万年前のいずれかの時期）の石狩低地帯に関する以下の古環境が明らかになった。１）底生有孔虫による古水深の見積もりによれば、水深40～90ｍの海底であった、２）底生有孔虫が示す海底の水温は、最高温度で10～20℃であった、３）浮遊性有孔虫化石が示す海洋表層の水温は16～31℃で、亜熱帯系の暖流が少なくても一時期は流入していた、４）上記のことから、当時は海峡と考えることができる、５）この古水温は現在の北緯35℃以南にあたる、６）この情報を元に教材化を行うとすれば、中学理科第２分野の「大地の作りとその変化」の単元の発展学習の素材として、あるいは高等学校地学IBの「地表の変化」の単元で、地域の大地の成り立ちを考察するための素材に利用できる。

生活科学科　2002年度は、５編の学士論文が編まれた。「男女共同参画社会における家庭科の役割－高等学校家庭科『保育領域』の学習を中心に－」は、保育、ジェンダー問題を考察し、ジェンダーフリー教育としての家庭科教育の役割を検討した。「家庭科教育における奉仕活動に関連した学習指導」は、学校教育の奉仕活動の意義と家庭科教育への展開の可能性を探した。「父親の育児参加」は、その背景と現状を調べ、高等学校の家庭科における取り扱いを考察、問題提起した。「女性の下着の変遷と現代の調査」は、洋装女性下着の発生と変遷を調べるとともに、他の被服類と対比して下着独特の特性を説明した。「食の現状とスローフード運動」は、スローフード運動に着目し、同運動と関係する他の諸運動や食材にかかわる膨大な資料を集め、人間らしい食のあり方と実現の方向を追求した。

体育・芸術教育系

音　　楽　今年度は以下の８編が提出された。

大場　郁子「音楽科教育における和楽器の取扱いと一展開」
佐藤絵里香「唱歌・童謡の『親しみやすさ』に関する分析的考察」
杉本　千夏「総合的な学習の時間における音楽表現活動」
高橋真奈美「小学校音楽科における器楽指導－“あわせる”楽しさを目指した合奏指導－」
原田　一寿「日本音楽の今日的課題」
前島なつみ「音楽療法的な活動をいかした小学校音楽科指導」
佐藤　直人「吹奏楽指導法－小・中・高校に於ける吹奏楽活動の指導と教育－」
苫米地千夏「幼児・児童におけるピアノ導入時の教本の研究」

美　　術　絵画は油彩一名、版画一名。油彩は手を素材にした表現主義的な具象と精神病と創造活動との関係を考察した論文。版画は紙の凹凸をプレスしたレリーフ表現と版画の今日的意義についての論文。それぞれに自画像の小品もつけられた。彫塑は一名。毛糸を編んで構成したインスタレーションの作品とファッションと美術のインターフェイスについての論文。工芸は二名。音に反応する灯りの作品と木の持つ癒しと木の民族楽器についての論文。もう一人は歯車の仕掛けによる遊具と高等養護学校における工芸教育の可能性についての論文。それぞれに組木による棚の作品がつけられた。美術教育は一名。これからの日本の美術館のあり方についての論文と

鏡面アクリルによる触覚的な立方体のオブジェ。以上であるが一年次にモラトリアムがあった学年のはじめての卒業制作であり例年に比べレベルダウンしたのでは？という意見もあった。

体　　育　今年度は、体育科教育、スポーツ指導の課題と学生個人の問題意識を反映した内容の論文が８編であった。「団体競技種目と個人競技種目における状態不安変化について～高校生女子スポーツ選手を対象として～」（阿部絹代）、「地域スポーツクラブに関する一考察～北海道バーバリアンズラグビーフットボールクラブに焦点を当てて～」（井上直哉）、「スポーツ指導者のスポーツ観、指導者観、指導実践に関する一考察」（因雅仁）、「団体競技スポーツ選手の理想指導者像と現実の指導者について」（熊谷朋也）、「女性スポーツ選手の意識と求める指導者像からみる女性スポーツの現状」（郷六春香）、「立ち幅跳びにおける２種類の跳躍方法に関する運動学及び動力学的研究」（鈴木英行、中井梓）「母指内転筋における筋収縮特性ならびに疲労性の性差について」（松永美希）、「勝利志向についての一考察～バスケットボールのファウルを取り上げて」（三浦直樹）。

〈社会教育課程〉

社会教育コース・教育学グループ

今年度は、教育学グループの古村先生が内地研究留学による不在であったため、百瀬が卒論指導を担当した。卒業論文提出者は、以下の10名によるものであった。提出者の数が多いため、以下、タイトルのみを記す。井向美鈴「札幌における余暇活動の一考察」、岩城裕「学力低下論争の行方」、大澤亨輔「札幌市におけるゴミ問題の一考察」、岡田巧「ペットと共に暮らす社会：ペットと日本人の共生を考える」、小原一美「農村地域における女性の社会参加に関する研究」、北野真也「吉田松陰による『至誠』教育：吉田松陰の松下村塾における教育とその明治維新に与えた影響について」、今野義仁「地方都市における中心市街地空洞化についての研究：新たな都市構造の転換と都市計画の可能性」、佐野大「消費者金融業界の現状と課題」、吉田和歩「生物の絶滅の現状と課題」、渡辺輔「ロックとは何か」。（百瀬　響）

社会教育コース・文化人類学グループ

今年度は、以下の４名が卒論を提出した。タイトルはそれぞれ、大内晶子「ルーツ探求に関する研究：その意味と分析」、岡田敬樹「『教育勅語』普及政策から見るその限界性：植民地台湾・朝鮮との比較を通して」、小川紀子「新生活運動の変遷とその影響」、岡安泰三「華族の養取慣行に関する考察」であり、各自が当該課題に対し、近代から現代の歴史的過程とその変遷を検討し、その社会的影響と意義を論じるものであった。大内による「ルーツ探し」は、家系・系譜作成の流行の変遷をその社会的背景とともに論じ、事例研究として自らのルーツを探る試みを行った。小川は北海道における「新生活運動」の実態と社会的影響を明確化し、岡田は第二次世界大戦以前における、国内と旧植民地であった台湾・朝鮮における「教育勅語」の扱いの実態から、「教育勅語体制」に対する学説史的批判を試みた。（百瀬響）

社会教育コース・地域環境学グループ

鳴海裕介：「新エネルギー導入の一環としての廃棄物エネルギーの活用の現状とそ

の将来性－札幌市の事例を中心とした検討－」～札幌市の清掃事業でのごみ焼却時のエネルギーの活用策としての発電について取り上げ、温暖化抑制効果を試算した。

仙名伸行・村山拓巳：「道央圏における河川環境の人為的影響の諸相」～石狩川水系の幾春別川・漁川・千歳川流域での市民活動と河川事業との関係や、ブラックバス等の外来種魚類の生態系への影響を検討した。

木下春香・白鳥理緒子：「ワーカーズコレクティブにおける地域事情と経済的自立に関する一考察」～歴史的背景と道内の２事例（パン工房、集いの場）の検討を行った。

阿久津明大：「風力発電の長短とその運用形態に関する研究」～デンマークやドイツの先進諸国の政策から、道内の導入事例（苫前・稚内・浜頓別）他における課題の検討を行った。

社会教育コース・福祉教育グループ

福祉政策研究室からは、2001年に起きたアメリカ同時多発テロ事件の背景と、その後の社会情勢を探った「平和に近づくためにーアメリカ同時多発テロ事件を知るー」、学校で起きたいじめ事件を日本的な人間関係の面から考察した「いじめ社会の日本的特徴－学校教育の現場に焦点をあてて－」の２論文が提出された。

また福祉教育研究室では、障害者の福祉支援サービスの新しい形として注目されるレスパイトサービスを展開している事業所を調査し、そのスタッフの質に求められるものを分析した「生活支援事業所のスタッフに求められる質についての考察」、知的障害者の生活質における地域的特性を外出行動から分析した「知的障害者の地域生活支援の地域差について－外出行動からの検討－」の２論文が提出された。

いずれも丹念な背景分析と調査に基づく論の展開が行われている点が評価された。

生涯スポーツコース・スポーツコミュニケーション分野

今年度は、生涯スポーツの課題と学生個人の問題意識を反映した内容の論文が10編であった。「垂直跳びにおける２種類の跳躍方法に関する運動学及び動力学的研究」（大西大、坂本安功）「野球のバッティングにおける運動構造と身体部位の貢献度」（大森太喜）、「スポーツクラブを支援するコミュニティボランティアに関する一考察～コンサドーレ札幌のボランティア参与者のボランティア観、参加動機に着目して～」（上山敦司）、「体育教師の印象に関する一考察～教員養成系大学における調査を中心に～」（熊谷優一）、「農村地域におけるスポーツイベントに関する一考察～栗沢町の事例から～」（東海林聖美）、「母指内転筋における収縮特性ならびに疲労性の性差について」（高橋恵）、「運動部活動における指導者の実態に関する一考察～北海道におけるスポーツエキスパート事業における顧問教師および外部指導者に焦点を当てて～」（沼佐一世）、「スケートボーダーに対する意識に関する一考察～札幌大通り公園における調査から～」（松田直久）、「高校生サッカープレイヤーにおけるサッカー観と指導者に対する期待感について」（三浦潤）、「野球の打撃時における並進運動の有効性について～バット・腰部に着目して～」（宮崎恭平）